

実施報告書の概要

トヨタ財団 2015 年度研究助成プログラム
「歴史的カイロにおいて歴史的建造物と伝統的居住様式を軸として
持続的コミュニティを考える」

D15-R-0158

代表者、深見奈緒子、日本学術振興会カイロ研究連絡センター・センター長

カイロ旧市街のスークシラーハ(武器市場通り)のバイトヤカン(ヤカン邸)において、周辺コミュニティの住民を集め、住民の歴史や遺産に対する意識の覚醒を目指した研究である。当該地域は世界遺産のコアゾーンに位置する地区で、14世紀から続く前近代のアーバン・ファブリックを有する。しかし、大都市カイロの近代化に加え、2011年以後のエジプトの政権交代等の社会動乱の中、歴史的建造物への公的保護はおざなりにされ、不法建築も目立つ。

こうした状況の中、地域住民の愛着や思い入れが遺産持続の基盤となるという考えから、身の回りの衣食住から歴史や地域との関係を見直し、個人や家族から、次第にコミュニティや町へと範囲を拡大し、「自分たちの街、自分たちの遺産」という方向性を住民の歴史や遺産に対する意識を覚醒することを目的とした。

上記目的のために、コアゾーンに位置するスークシラーハに所在する修復中の歴史的建造物バイトヤカンにおいて、(1)住民を主体とするワークショップの開催、(2)行政を巻き込んだ地域の活性化、(3)日本での住民参加型の街づくりの経験伝える活動を行った。

以下、上記3項目の活動を報告し、そのほかの活動を述べたのちに、本研究の成果を記す。

(1)住民を主体とするワークショップの開催

「第一年度目標：現在の住環境(衣食を含む)を確認し、その中の歴史的要素に気づく」「第二年度目標：住環境を向上させるための方策を考える」を設定し、2年間に計29回のワークショップを開催した。

ワークショップの場所に関しては、15世紀創建のモスク壁を共有し、オスマン朝時代創設コーケリアン邸を19世紀にヤカン家が購入・改築したバイトヤカンという歴史的な中庭住宅で行うことにした。バイトヤカンは住民のセンターを目指しての現在も修復中で、ワークショップごとに修復が進んでいく姿を参加者が目の当たりにできることも、遺産再生に対する意識向上につながっていくと考えた。

初年度には、女性と子供を対象に7回のワークショップを開催し、地域の遺産や歴史の共有、問題点の発見、公共に関する考え方などをテーマとした。「持続的コミュニティを考える」という課題に対して、1年目のワークショップでは、持続という点からは重要な担い手でありながら表面に出ることの少ない女性および子供達を対象とし、男性や商店街の人々については、個別のインタビューをして、意見を集約する方法をとった。ワークショップでは各回のテーマを設定し、最初にその説明を行い、続いて女性と子供に分かれ、女性たちとは小さなレクチ

ヤーののちに小グループに分かれて対話型、子供たちは活動型のワークショップとし、最後に全員でワークショップの発表、その後に食事をとる形で進めた。

次年度には、第9回ワークショップ 2017年6月17日「イフタール(断食月の供食)」を機に、街の総意を集めるために、男性のワークショップも並行して開催し、地域の拠点としての歴史的建造物バイトヤカンをどのように使っていくのかという点を議論した。その結果、男性たちは、地域の特性として木工を中心とした伝統工芸を振興することをテーマとし、現在組合作りが進行中である。女性たちは、街をよくしていくためには、その前提として自立した収入を家庭内の仕事から得るという点から、手芸の講師を依頼し、技術の向上に勤めている。子供たちは集団で遊ぶということから規則を守ることや、片付けをすることを学んでいる。2年度目に男性のワークショップを開催するようになってから、自分たちの街をよくしていくためにはどうしたら良いかという具体的な目標が定まってきたように思う。以下各回の概要を記す。

【第1回ワークショップ】2016年7月30日「スークシラーハの好きな場所」

住民側から(女性16名、子供27名)、その他総勢60名が参加。地域を住民がどう捉え、その魅力は何かに焦点をあて、互いを知り、生の声を集めた。

女性は3つのグループに分かれ、質問事項に対して答えていく形で、エジプト人学生等にアラビア語日本語の通訳を依頼した。子供達にはかなりの年齢幅があったが、みんなで遊び、あるいは絵を描いたりするなかで、約束ごとを守ること、身の廻りの整理等の基本的な生活習慣を身につけるよう指導した。

女性のインタビューからは、この地域にお嫁入りして住み始めた人や3世代以上にわたって住み続ける家族もあった。ほぼ全員が自分たちの住区が好きで、今後ともこのあたりに住みたいという意見が多かった点は興味深い。子供達に関しては、このような機会が初めてだったせいか、はしゃいでしまい、なかなか指導者のいうことを聞けない側面も見られた。

【第2回ワークショップ】2016年9月3日「訪問者への案内と歓迎：歩いて街を紹介する」

住民側から(女性7名、子供40名)、共同研究者の宍戸も加わり、あわせて総勢77名が参加。女性達と街を歩くという企画ながら、エジプト人女性は歩くことが苦手、知らない人と街を歩くのは嫌という理由から女性参加者が少なかった。

女性たちには、バイトヤカン近傍の6つの歴史的モスク建築を選び、そこまでの案内を依頼する形をとった。各所での写真撮影、詳細な地図に感想を書き込みながら、ツアーを進めた。女性たちは、各グループとも積極的に地元の人々と外部の我々をつなぐ努力が見られた。女性たちはいままで知らなかった知識を地元の人々から得る側面も見られ、参加者は少なかったが成果はあった。

子供達については、3歳から16歳と多様で、それぞれが小さな絵をかき、大きな画用紙に貼り付け、作品を完成させた。本来は部屋の様子や、こんな家に住みたいという絵を描く予定だったが、それぞれの好きな絵が、みんな合わせると大きな作品になることに喜びを感じていた。

【第3回ワークショップ】2016年10月15日「一年の歳時記と一生の行事」

住民側から(女性15名、子供54名)、総勢89名が参加。生活の中には、昔から続いてきたものが多く、歴史は身近だという認識の手がかりとしたいという目標

を立て、女性グループでは一年、一生の伝統的行事を題材に話し合った。まず日本の事例を紹介し、その後、グループに分かれて5グループに分かれ、エジプトの行事、誕生、結婚、死別などの儀式について話し、時間の節目は、伝統的な衣食住やコミュニティの絆と深く関わっていることを確認した。子供グループでは、伝統的な遊び(エジプトのハンカチ落とし、鬼ごっこなど)の活動的なグループと、お絵かきや日本の折り紙など静かなグループに分かれた。

第1回、第2回ともに最初の挨拶と今日のテーマの説明ののち、大人と子供のグループに分かれ1時間ほど活動し、最後にみんなで集まってそれぞれの活動を報告する形を取った。第3回目から最初の挨拶ののちに、日本のラジオ体操とエジプトの子供体操を行うことによって一体感が増した。また、第3回からは女性は2階の広間に移ってミーティングをし、子供達は中庭とその周りの1階の部屋を使うこととした。ただし、それぞれのグループの報告部分では、子供たちが集中して発表を聞くことは難しく、課題が残った。

【第4回ワークショップ】2016年12月3日「伝統的工芸と文様」

住民側から(女性17名、子供55名)、共同研究者の原田が加わり、総勢95名が参加。女性グループは、まず日本の伝統的文様とイスラームの文様の比較を深見が紹介、その後、グループに分かれ、手作り品や手芸等について話しを聞いた。なお、バイトヤカンでは11歳以上の子供達のために月に2度ほど幾何学工芸教室が開かれ、2階の広間に子供達の作品を展示し、子供達が作品を説明した。

子供は、小さなグループに分かれて、バイトヤカンの建築装飾から文様を探し拓本をとり、幾何学文様の塗り絵の色付けや、日本の切り紙細工で同じパターンが生み出せることを教え、作品を作った。スークシラーハに残された歴史的建造物には数多くのパターンが使われ、細部に気づくことや、パターンの繰り返しによって文様が広がることなど、遺産との距離が縮まった。

【第5回ワークショップ】2017年1月14日「アッタール(薬種商)、美容と健康」

住民側から(女性23名、子供60名)、総勢105名が参加。女性たちは、日本の薬の行商や食べ合わせを紹介、その後近傍の薬種商の店主を招き、エジプトの生薬を説明してもらった。最後にグループに分かれて、普段美容や健康で気遣っていること、母や祖母伝来の治療法や美容法について話しを聞いた。

子供達は年齢別に3グループに分け、7歳以下の子供達は、小麦粉に食紅を混ぜて色粘土を作り、それらを混ぜていろいろな色を作って、作品を制作した。8歳から12歳の子供達は学校の様子を模造紙に描き、13歳以上の子供達はダンボールで家を作った。13歳以上の子供達が作った家に、小さな子供達が作った粘土作品を運び、お互いのグループの交換を図った。

人間が積み重ねてきた工夫の一つが伝統的医薬(化学)であることを大人の女性に認識を促し、子供達は協働することの楽しさを確認できた。

【第6回ワークショップ】2017年2月18日「遺産て何？」

自分が大切にしているものは何かを再認識し、ものが様々な付帯情報と結びつき、最終的には時間の流れとも結びついていることを見極めることにあった。住民側から(女性25名、子供53名)、共同研究者原田ほか、総勢99名が参加した。

女性たちには、自分が大切にしている思い出の品を紹介してもらった。若い頃のヴァレーボールチームのユニフォーム、両親の結婚写真を持参した女性はその思

いについて語り、女性参加者は共感した。

子供達はティーン・エージャーとそれ以下にわけ、前者はグループごとに大切にしているものを紹介してもらい、ものにまつわる情報を聞くことで、ものの価値を話し合った。価値の中で、家族とのつながりが大きいことを再確認した。後者は、エジプトの宝として、綿、小麦、粘土をバイトヤカンに隠し、宝探しのゲームを行い、その宝を使って作品を作った。

このワークショップに先立ち、17日に原田、深見ほか日本人スタッフ6名がバイトヤカンに集まり、うち4名が宿泊し、夜のスークシラーハの様子を調査した。ワークショップだけでなく、夜も賑やかな工房・商店街の様子を観察できた。

【第7回ワークショップ】2017年3月8日「街区を歩いて、アズハル公園で遊ぶ」

スークシラーハはダルブアフマル(赤い界限)という地区にあり、ここは10世紀に成立したアル・カーヒラの南市壁、12世紀半ばに成立した城砦から北に延びるカイロの東市壁に区切られた歴史地区である。前近代には邸宅街であったが、20世紀にはいると裕福な住民は新市街に移動、次第に住宅の細分化、街区の劣化が始まった。街区再生の事業として、1990年代からアガ・カーン財団によって、市壁街のゴミ捨て場だった岩山が住民のため(入場料の割引があるなど)のアズハル公園として整備された。ところが住民の中には公園に対する誤解(公園は恋人たちの場所など)から行ったことのない人も多かった。そこで、バイトヤカンから歴史的街区をあるいてアズハル公園に行き、一緒にアズハル公園を楽しんだ。街区を歩き、公園で解散したので、基本的には親子同伴での参加を促した。住民側から(女性29名、子供80名)、共同研究者布野ほか総勢135名が参加した。

バイトヤカンで目的を話したのち、グループごとに出発、それぞれ聞き取りをしながら公園まで歩き、丘の上の広場に集まった。丘の上の広場では、スポーツチャンバラ、凧揚げ、風車作りなど幾つかの競技を準備し、子供も大人も一緒に楽しんだ。アズハル公園が身近になっただけでなく、自分たちの住んでいる地域を外から眺め、意見を交換するという機会を持てたことは一つの成果であった。

【第8回ワークショップ】2017年4月15日、準備4月14日「エジプト母の味を作る、味わう」

助成の節目にあたり、ちょうどエジプトの春香祭の期間であったため、伝統的な食に焦点をあてた。住民側から(女性25名、子供68名)、共同研究者原田、磯野ほか、あわせて総勢113名が参加した。

女性たちには、共同研究者アラーから伝統的な食事に関するレクチャーののち、グループにわかれ、ご馳走や食習慣等について聞き取りを行った。子供達は、マフシー(詰め物料理)の野菜の切れ端でスタンプを押したコック帽子をそれぞれ作って被り、小麦粉粘土で、自分たちのご馳走を作成した。

その後、マフシーと日本食のフード・マーケットを催し、それぞれがお皿をもって、部屋を通り抜ける際に、食事が配られ、中庭に出て、手作りの食事をみんなで食べた。フード・マーケットには、子供達の作品を展示した。

前日に、いつも参加している女性達とティーンエージャーの女の子たちにマフシーを日本人および通訳スタッフに教えてもらい、みんなで15日のワークショップ用のマフシーを作った。

女性も子供も、食に関してはかなり積極的で、意見も多く、活発な会となった。こうした意識を歴史的建造物につなげていけると、大きな転機が訪れるだろう。

【第9回ワークショップ】2017年6月17日「イフタール(断食月の供食)」

イスラーム暦のラマダーン(断食月)には、みんなで日暮れの食事を楽しむ習慣があり、住民たちがバイトヤカンに集まり、食事を行った。女性と子供だけではなく、男性も含めた家族を招待し、みんなで楽しむと同時に、今までの活動の写真を引き伸ばし、バイトヤカンの1階の室内に展示し、住民とともに活動を振り返った。住民からは、女性8名、子供31名、男性4名が参加した。

イフタール前、5時から集まり、子供達や女性たちと一緒に、食事の場である中庭の飾り付けを行なった。今までのワークショップで子供達が描いた絵を紐で飾り付け流と同時に、当日には折り紙等を用意し、その場で作った作品も合わせて、日本の七夕のような飾りとした。通常は女性と子供が共同制作することはなかったので、大人と子供と一緒に作業できたことは、双方にとって有意義であった。いつものバイトヤカンと違う雰囲気の中で、皆楽しんでいた。

男性からの意見に、近現代の建築のマッピングを行うと面白いのではという意見が出て、女性と違う観点があることがわかり、男性のワークショップも次回からは開催の方向で進めることとした。

【第10回ワークショップ】2017年7月8日「イスラーム美術館を訪ねる」

カイロのイスラーム博物館は、カイロを中心に中東のイスラーム美術の銘品を所蔵することで世界的にも有名な博物館である。20世紀初頭に創立され、スクシラーハから徒歩15分ほどの近さにも関わらず、住民の多くは今までイスラーム美術館を訪ねたことがなかった。イスラーム美術の銘品を観察することは、カイロの遺産を理解する上で重要である事から、本企画に至った。ただし、交通量の多い中を歩かねばならないので、安全性の点から10歳以上の子供たちを中心に参加を募った。若い人たちに自分たちの遺産の意味を知ってもらいたいという意図も含んでいた。10名の参加者の中で、一人だけ、住民の中からシハームさんという40代の女性が参加した。

最初にバイトヤカンに集合し、8つのグループに分かれてイスラーム美術館を訪ね、それぞれに気に入った作品を現地でスケッチし、バイトヤカンに戻ってからなぜその作品を選んだのかをみんなの前で発表してもらう形式とした。

参加者は作品を熱心に観察し、それぞれ納得のいく説明を発表し、発表を聞く姿勢も真剣であった。男子は武器、あるいは呪いの書かれた服、女子は文様やカーバの鍵などへの興味を語る者が多かったが、先のシハームさんはイスラームの中でユダヤ教徒が共存し、作品を作った点に感動したと発表した。彼女には、これからもこの地域を牽引するような人物になっていくことを期待した。

【第11回ワークショップ】2017年7月28日「男性住民とともに近隣環境を考える」

イフタールに男性を招待し新たな展開への道筋を考えたため、男性を集めて、「この街をどうしたいですか？」という質問票にそれぞれ答えていく形をとった。男性16名、男の子1名がアンケートに答えた。

ワークショップに先立ち、エジプト人の通訳、日本人参加者、近所の子供達と一緒にバイトヤカンの周辺の路地のゴミ拾いをした。エジプトでは、家の窓から

街路に構わずゴミを捨てる習慣があり、公的空間としての街路という認識がなされていない。バイトヤカンの中庭を使うときにも同じ意識が見られたので、1年間を通して住民にゴミはゴミ箱へという教育を進めてきた。今回の試みは、みんなで使う中庭よりもさらに公的性格の強い路地へと意識を広げ、住環境へつなげる意図があった。ゴミ拾いで路地は綺麗になり、参加者の気持ちも清々しくなる効果があり、今後もワークショップ前にはゴミ拾いをすることにした。

ワークショップでは、子供達と大人に環境教育の専門家である諏訪正和氏が紙芝居で環境の大切さを話した。その後、各グループに別れて、質問票に取り組んだ。この街からなくなってしまうものには、ゴミ、トゥクトゥク、仕事の無い若者などがあり、この街の好きな場所には、古いモスク、城塞、喫茶店など、この街に欲しいものには、図書館、木工の展示場、スポーツ大会などが上がっていた。男性の多くは、妻が外で仕事をする事を望んでいないこともわかった。

【第12回ワークショップ】2017年8月19日「スークシラーハの現状を聞き、未来を考える」

本ワークショップは、8月17日から21日までのエジプト人建築科学生と日本人建築科学生が協力してスークシラーハの未来の姿を考えた成果を、住民に説明し、住民の意見を聞く形をとった。

日本人学生とエジプト人学生双方からなる6グループを作成、スークシラーハ周辺の6敷地に対して未来の案を考えた。それぞれ1)バイトヤカン近くの交差点周辺、2)スークシラーハに面する4つのサビール・クッタブ(学校付給水場)、3)ハンマーム(公衆浴場)を含む大通り近くのエリア、4)密集した街区エリア、5)20世紀初頭に区画整理されたエリア、6)スークシラーハ通りが分岐するエリアとした。それぞれのグループで、町を実際に歩き、測り、創意工夫のある提案を行なった。

住民からの反応としては、それぞれの案に対して、1)女性や子供の間となる公園的な交差点、2)カフェテリアや図書館として再生したサビール・クッタブ、3)現在は休業しているハンマームのスーパー銭湯を模した再生、4)街区エリアへの門の提案、5)住宅を利用したアイスクリームスタンドやギャラリー、6)空地エリアを道路と結びつけて使う点などが評価された。住民に関しては、男性、女性、子供達も参加し、日本との差異などに関して、議論が進んだ。

共同研究者布野が日本大学生産工学部の教授や学生、あるいは京都大学の卒業生を牽引し、日本人学生が参加できたともに、日本での事例を紹介する講義も開催した。また日本の夏休み期間のため日本人研究者の参加も多かった。

【第13回ワークショップ】2017年9月9日「みんなで街の未来を考えよう」

地元の男性たちを集めて、住民参加型のまちづくりを目指していくことを検討した。職人たちからは組合を作って組織化し、資金集めをする必要性が発せられた。さまざまな意見として、歴史的建造物が火災にあった際にも、政府は何もせずに住んでいる人を排除し、廃墟化の道をたどる。住民としては歴史的区域だと認識しているにもかかわらず、他者からはスラムだと思われる点は、腑に落ちない。歴史的建造物、特にサビールなどは崩壊の危機にあるのに、政府は何も行動を起こさない。こうしたことを、打開するためには、一人々々の意見を大切にするとともにグループとしての意見をまとめていくことも必要である。

日本から、共同研究者の宍戸が参加し、カイロの伝統的コーヒーショップ(アフワ)調査について発表した。アフワはお茶を飲むだけの場所ではなく、地域のことも話し合える可能性を持つのではないかという指摘があった。

参加者の総意として、住民がまとまっていく必要性を浮かび上がらせた会となった。また、その際にスークシラーハの主産業である木工職人を中心とする提案がなされ、歴史的建造物との繋がり、あるいは伝統産業の保全の点からも、次回から試みることを決定した。

【第14回ワークショップ】2017年10月28日「木工ユニオンに向けて(1)」

前回に提案された木工組合(ユニオン)の結成に向けて、木工職人が中心となって組合を結成、それを歴史的街区の保存や住民参加型のまちづくりにつなげていく方向性を確かめる最初のワークショップとなった。19名の職人が参加。

メヌーフィヤ大学博士課程で伝統的職人の研究するアーリアから伝統的木工細工について、また歴史的建造物との繋がりについて説明があった。続いて、職人たちが自分たちの仕事や作品を紹介し、困っている点を話した。仕事を得ることが難しく、昔は人を雇っていた工房も、現在では細々と運営している人々が多かった。家具職人たちは今までの個人顧客に対応する方法しかない現状であるが、顧客層が近代的なIKEAなどの家具ショップへの傾倒していく点があり、また彼らは家具製作の一工程としての下請け仕事をしており、展示場をもつ大きな店への出展する方法を取っているとのことであった。

組合の利点として高価な機械の共有、新たな技術の導入、伝統的デザインの継承があるが、そのためには製品の販路を広げること、効率や生産性の向上、適当な指導者などいくつかの課題がある。また、木工職人が主導するとはいえ、住民や他の職業との良好な関係を保ちながら、歴史的街区としての地域の全体の向上を考えねばならない点を共有した。

【第15回ワークショップ】2017年11月8日「みんなの夢の場所を作ろう」

地域活性化の専門家である三好崇弘氏を講師として、女性と子供を対象に、今まで1年と3ヶ月ほど活動したバイトヤカンが、みんなの場所としてどうあって欲しいのかを話し合うワークショップとした。地域住民は子供達43名、女性19名が参加した。

子供達には、ダンス大会をしたのち、自分の夢を紙に描いてもらった。バイトヤカンを公園のように遊べる場所、図書館、コンピューターを学べる場所などという絵が多かったが、自分の将来つきたい職業を描いた子たちもいた。

女性はまず二人一組となり、住環境を向上させるためにバイトヤカンをどう使ったら良いか5つの願いを相談して書き、それを実現するためにはどうしたら良いかという5つの行動を書き、それを壁に貼って大事なものにそれぞれ5票を投じるという形式をとった。その結果、1)女性たちのカルチャースクール開催、2)子供達の勉強スペース、3)ゴミの問題の解決が上位を獲得した。女性たちにとって、家で収入を得るために何らかの技能を身に付けること、子供達の教育が大きな課題となっていることがわかった。

【第16回ワークショップ】2017年12月16日「木工ユニオンに向けて(2)」

第14回の続きのワークショップで、木工ユニオンを作るためにはどうしたら良いのかを話し合った。

11名の職人参加者に質問票をわたし、ユニオンや木工を中心に聞き取りを行った。1990年代までは職人組合があったものの現状においては存在していない点、後継者の問題を多く抱えている点などが明らかとなった。ユニオンができることによって、いろいろな人に自分たちの仕事の紹介をできる点、あるいはバイトヤカンを展示場として使う可能性、職人それぞれの分業を統合して一つの製品として扱える点などが上がった。

【第17回ワークショップ】2017年12月20日「木工ユニオンに向けて(3)」

実際にユニオンを作成するために、名簿を作成していくことを決めた。また2018年1月にバイトヤカンでシンポジウムを開く際に、ユニオン参加者の作品を展示することを決めた。ユニオンの目標として1)バイトヤカンを中心に据えること、2)力を合わせることで、3)若い人を巻き込むこととした。

考古省やイギリスでアラブの伝統家具を研究するエジプト人研究者なども参加し、いろいろな議論を交わせる会となった。

【第18回ワークショップ】2017年12月23日「私たちのバイトヤカンに向けて(1)」

女性と子供たちが標語として「私たちのバイトヤカン」を決め、「私たちのバイトヤカン」に向けて、どのように活動していけば良いのかを考えた。

女性たちは、前回の3つの目標について、以下のような答えを出した。1)自分たちのスキルを身につける場所とするために、手芸の教室をバイトヤカンで開き、そのための指導者を見つける、2)子供達が勉強できる場所とするために、週に1から2回くらいの機会があることが望ましく、バイトヤカンにその場所ができれば自分たちが一緒にその場に付き添う、3)ゴミ問題の解決に向けては、参加者の中に回収業者を知人がおり、次回にその人の話を聞く。

子供達は前回の続きで、「みんなの夢の場所」についての絵を、1月のシンポジウムの際の展示会に飾る準備をした。地域でNGO活動をしているグループと若者の音楽グループが、ワークショップのことを聞き、ぜひ参加したいとのことで、子供達の活動を支えてくれた。活動が地域に根ざしてきたことを感じた。

【第19回ワークショップ】2017年12月27日「木工ユニオンに向けて(4)」

木工ユニオンに向けて、ワークショップの前に深見がそれぞれの工房を訪れて、聞き取りと写真撮影を行った。1月の展示会に向けて、どのような作品を展示できるのか、提出の期限、大きさなどを話し合った。

【第20回ワークショップ】2018年1月6日「私たちのバイトヤカンに向けて(2)」

バイトヤカンを自分たちの場所にするために、女性たちは刺繍の指導者を招き、作業を行った。またゴミ買い上げの業者を呼んで話を聞いた。

子供達は、前回の「みんなの夢の場所」の絵を厚紙に仕上げた。前回と同様に地域の協力者の力を借り、スムーズにワークショップが進んだ。特にフェイス・ペインティングや音楽演奏に、子供達は楽しんでいる様子であった。

【第21回ワークショップ】2018年1月7日「木工ユニオンに向けて(5)」

展示会へ向けての話し合い。ユニオンのロゴの案をみんなの意見をもとに作成した。木工ではなく銅製品を持ってきた職人もおり、木工を超えて、様々な手仕事を含んだ展示会とすることを決めた。また、写真出展と本物とはどちらが良

いのかという話となり、実際の作品に限ることとした。加えて、それぞれの工程がわかるように、木彫工人は塗装前の作品を展示することも可能とした。

【第22回ワークショップ】2018年1月14日「木工ユニオンに向けて(6)」

展示会に向けて、出展者の名刺をアラビア語と英語で作成した。木工には、組み立て、彫刻、塗り、布の過程があり、彫刻はアラブ風の象嵌(アラビー)、ロクロ細工(ハッラート)、ヨーロッパ風の彫刻(オイマ)の3つに分けられる。それぞれの専門があるので、展示会ではその工程がわかることを目指す。

ユニオンの役割として、良い品質を維持すること、仕事を増やすこと、若い人を育成することが重要で、特にデザインなどは上手な人が他のメンバーに教えていくことが必要な点を確認した。また、新たな機械の導入については賛否両論があり、伝統的なものが機械の導入によって壊されてしまうのではないかという懸念を示す人もいた。若い人がトウトウトの運転手など日銭の稼げる仕事を選び、木工職人になりたい人が減っている点を、ユニオンを用いて解消できる道筋を探ることも重要であることが指摘された。

【第23回ワークショップ】2018年1月20日「私たちのバイトヤカンに向けて(3)」

女性と子供を対象とした一連のワークショップ。

女性たちが作品を持ち寄り、皆で回し、それぞれ良いところと悪いところを指摘した。またエジプトの高価な刺繍作品を回し、それとどう違うのかという点を認識し、売れるものを作るためにはどうしたら良いのかを皆で考えた。

子供達は、前回までに作成したそれぞれの作品を合わせて一つの作品にすることに挑戦した。

【第24回ワークショップ】2018年2月3日「木工ユニオンに向けて(6)」

1月末の展示会とシンポジウムが終わり、今後どのように木工ユニオンを進めていくのかという話し合いを持った。遺産、次世代、良好な環境、ビジネス、健康、技術習得などの目標のもとに、それぞれどうしたら良いかという意見を整理し、最終的にはビジネスがうまくいくためには、NGOを作って安定した価格で材料を仕入れることに意見がまとまった。

【第25回ワークショップ】2018年2月10日「私たちのバイトヤカンに向けて(4)」

女性と子供を対象とした一連のワークショップ。女性も子供も、バイトヤカンで集まることで、仲良くなり、そこで過ごす時間に喜びを見出すようになった。

女性たちは、1月末の展示会、シンポジウム、コンペを振り返った。新たな指導者を招き、レース編みを教わった。

子供達は、外遊びとお絵かきのチームに分かれて活動を行った。

【第26回ワークショップ】2018年2月28日「木工ユニオンに向けて(7)」

プロジェクトも最終段階に至ったので、佐藤寛氏(アジア経済研究所)をリーダーとし、三好崇弘(外部評価コンサルタント)及び原田怜(共同研究者)からなる評価調査団が現地を訪問し、評価調査を実施した。その際に、男性住民を主体としたワークショップを開催した。

まず参加者の紹介のあと、バイトヤカンの活動に参加したか否か、参加した場合、どのような活動がもっとも印象が残ったか、自分や地域が変化したことがあ

ったか、何が地域の課題(残る課題)について、話をしてもらい、その話の内容をファシリテーター(司会者グループ)がポストイットに要約した。意見が出そろった中で、一人 5 票をもって、もっとも同意できる意見について投票をしてもらい、その投票結果についてさらに議論を深めた。

男性たちは、ユニオンの実現、道路の美化、ハンマーム(公衆浴場)のコンペ、展示会の開催、コミュニティーの実現、などに地域の変化を感じていることがわかった。また、歴史遺産を保護することは街が綺麗になり、多くの人や観光客が集まり、活性化に繋がるという意見であった。

【第 27 回ワークショップ】2018 年 3 月 1 日「私たちのバイトヤカンに向けて(5)」

上記評価調査団のワークショップの女性版。女性たちの評価は男性とは異なり、家で収入をえる技術の習得、子供達への教育、みんなでバイトヤカンで過ごすことの楽しさが主で、この街が好きになったという肯定的意見もあった。

歴史的建造物に関しては、自分たちの歴史だから大切にすべきだという意見があった反面、古い建物は毎日の生活の糧とは関係ないので守れないという意見もあった。

【第 28 回ワークショップ】2018 年 4 月 11 日「木工ユニオンに向けて(8)」

木工ユニオンの申請書の確認のワークショップで、男性のワークショップとしては最後の会となった。組合の目的としては、短期的には 1) 工芸の復活と普及、2) 現在の問題(後継者、販路等)の解決、3) 職人の技術向上、4) 若者の教育のためのワークショップ開催、5) 展示会の開催、長期的には、1) 材料を廉価で購入する道を開く、2) 現代的な技術と機械の導入、3) デザイナーと提携して固有性を打ち出すことを承認した。

【第 29 回ワークショップ】2018 年 4 月 14 日「私たちのバイトヤカンに向けて(6)」

一連のワークショップの中の女性と子供の最終回。女性は共同研究者アラー氏を中心に、今までは日本人グループが主体となってやってきた活動をどのように自分たちで実現していくのかを話し合った。女性たちの手芸のための教室、子供達の集まりは、バイトヤカンとの交渉の中で続けていく方向性を決めた。

子供達も、自分たちで遊ぶ方法を確立し、また自分たちの街の歴史も認識するようになり、2016年7月の最初のワークショップからの大きな進歩がみられた。

(2) 行政への働きかけと共催シンポジウムの開催

2017 年 2 月に実施した行政側の聞き取り調査を基盤に、2017 年 8 月と 2018 年 1 月にカイロ市、National Organization for Urban Harmony (NOUH) とシンポジウムを共催した。2 回のシンポジウムは、「(3) 日本での住民参加型の街づくりの経験を伝える」で後述するアラー氏の日本訪問と深く関わっており、アラー氏の訪問を進展させる形となった。日本からすでに日本で関係を構築した講師を呼び、日本での歴史的地区での実例を紹介し、意見交換を行った。2018 年 1 月にはカイロの歴史的街区に関する 11 項の勧告をまとめた。

【聞き取り調査】2017 年 2 月 15 日～23 日

原田、アラーが関係者11名(NGO、考古省、文化省 NOUH、カイロ県遺産課、UNESCO、アガカーンプロジェクト等)に対して、スークシラーハで住民啓蒙活動の必要性について聞き取り調査を行なった。

第一に、プロジェクトの継続性を考える上では、文化遺産保護からは直接に関係ないと思われても住民が必要と思う活動を実施することが重要性である。一例として、アガカーンプロジェクトでは、識字率を向上するプロジェクト行なうことを文化遺産保全プロジェクトに組み込むことで、住民をプロジェクトが追いかける立場から、住民から追いかける(プロジェクトを求める)姿勢に変わったことが、プロジェクトの成功に影響を及ぼした。

第二に、現行の法律や制度が文化遺産保護に悪影響を与え、それを改善する必要がある。例えば、現行の文化財保護法の主な施行者である考古省は、モニュメントは基本的には凍結保存であり、活用について十分に検討していない。その点を文化省は理解し、対策として文化財保護法を補完するような保護政策を立案している。また 1992 年の大地震以降古い建物は一括して「倒壊の危機にある」と見なされ、文化財の保護活用をするための申請の行政許可が下りにくい。

第三に、ユネスコのプロジェクトにおいて既に事業実施のための必要な調査は済んでおり、実施の許可が出ていないため、調査結果が活用されていない。

以上の結果から、遺産保全関係者のスークシラーハに対する活動意識は高く、また既に多くの調査資料が存在しており、それらを活用したプロジェクト実施への期待も高い。各団体から、それぞれ本プロジェクトと協力した活動案も具体的に提案された。例としては文化省とともに日本の登録文化財や町並み保存の制度を勉強しエジプトの施策に反映するためのワークショップや、カイロ県と協力し古い家は一律に倒壊の危機であるわけではないということを各地域の担当者に理解してもらおうワークショップ、また考古省と協力し普段一般公開されていないモニュメントへの特別入場許可を取り地域の住民に一時的に開放する案などがあげられた。

【第1回シンポジウム】2017年8月20日

本シンポジウムは、上記聞き取りをふまえた上で、文化省の下部組織である NOUH と共同で、スークシラーハでの活動の報告を目的とし、バイトヤカンで開催した。第12回ワークショップで先述したように、住民のワークショップに加え、日本とエジプトの学生の共同設計の一環として行われた。地元住民に加え、NOUH 職員、エジプトの研究者や大学生、保全関係者、および日本からワークショップに参加している研究者や学生が参加した。なお、本シンポジウムは後述する共同研究者アラーの日本訪問(2017年5月22日~25日)を発展させる形で行われ、日本における歴史的街並みの保存や伝統的住宅のリノベーションをエジプトの行政側に紹介する機会となった。

共同研究者のアラーがバイトヤカンでのトヨタ財団のワークショッププロジェクトについて紹介、共同研究者の布野が京都を中心とした日本での歴史的街並みの保全や民家のリノベーションについての講演を行った。また、今までアズハル大学サラ教授の元でのダルブアフマルの改善コンペ案が展示され、サラ教授による説明もなされた。NOUH 代表のムハンマド・アブー・サーダがスークシラーハの改良事業についての説明をした。

住民からも NOUH や京都の事例に関する質問もあり、日本での実例を行政や住民に提示するだけでなく、行政と地域住民をつなぐ一つの機会となった。

【第2回シンポジウム】2018年1月31日

1月31日に式典を開催した。なお、本シンポジウム(式典)は NOUH、カイロ市遺産局、日本学術振興会カイロ研究連絡センターとの共催で一連の行事の一環で、全容は、1)コンペ、2)講義、3)展示会、4)式典からなる。

1)コンペに関しては、1月初旬からバイトヤカン周辺の改善計画に関するコンペ案を、大学生を中心に募集した。14作品の応募があり、それを1月31日に審査、当選案を決定した。なお、審査員には、共同研究者のアラー、原田、深見、日本から参加した荒牧(npo 法人全国町並み保存連盟)、NOUH のハイジ、カイロ市遺産局が当たったが、住民からの意見を考慮した。この案は NOUH の事業として、実施される予定である。

2)一連の講義は、29日から31日に行われた。1月29日には NOUH の事務所で、NOUH の事業、荒牧による川越での住民参加の実態、30、31日にはバイトヤカンに場所を移し、木工ユニオンの組織化について、エネルギー消費からみての遺産保全の利点についてなどの発表が行われた。NOUH やカイロ市で保存に従事する専門家が参加し、新たな情報をえる重要な機会となった。最後にはカイロの歴史的街区に関する11項の勧告をまとめた(概要は以下の通り。1. NOUH、考古省、カイロ市が協力し、大学や研究所を巻き込む。2. 崩壊しそうな遺産を救うために価値に基づく登録が必要である。3. 所有者が遺産保存を進んで選択するための法改正が必要である。4. 古い賃貸法を改正し、歴史的建造物の所有者や賃貸者は建物を保全し、定期的な修繕・保存する場合に遺産を継承できる。5. 歴史的建造物の不動産価値を再評価する。6. 歴史的建造物の保全のために必要な現在の法規制を活性化、強化する。7. 歴史的建造物の保全のための基金を設立する。8. 若い世代に歴史的建造物保全の重要性を伝える。9. 持続性のために地域住民の総意をまとめる。10. 日照権・空中権を活性化する。11. 歴史的街区における都市保全法を施行する。)

3)展示会は、地域住民の作品と一連のワークショップの作品で、木工、女性の手芸、子供達の絵であった。木工に関しては、職人の作品であり、シンポジウムに参加した人によって、購入されたものもあった。女性の手芸はまだ商品には至っていない状況で、次のワークショップの課題とした。子供達の作品は地域やバイトヤカン、自分の未来への夢をテーマにしたものであった。

4)式典は、NOUH の所長、在エジプト日本大使が式辞を述べ、国際交流基金エジプト所長や研究者、実務者、学生など多くの参加者で賑わった。ここでも荒牧が川越での住民参加の実態を講演した。

(3) 日本での住民参加型の街づくりの経験を伝える

1)2017年5月に共同研究者のアラー氏を日本に招聘、上述した2)2017年8月のシンポジウムと一連の行事、3)2018年1月のシンポジウムと一連の行事を用いて、日本での経験を紹介した。2)と3)については上述したので、1)について述べる。

日本とエジプトの文化財法制はかなり異なるが、日本の伝統的建造物群保存地区条例、登録文化財制度など、エジプトの行政にとっての新たな情報は、今後さらに歴史的街区の保存を進めていく上で、大きな収穫となったと思われる。また、住民参加型の保存については、エジプトには実例がなく、日本での経験は今後、スークシラーハの住民を鼓舞することとなった。

【共同研究者のアラー氏を日本に招聘】2017年5月18日～28日

熊本、川越、京都、東京の谷中といった日本の伝統的な建造物を保存・活用している地区を中心に見学と地域の担当者および住民との会合をもうけ、意見交換を行い、日本での遺産保存に関する住民参加の状況、また街並み保存の実例の見学を行った。これを通して、文化遺産保全の日本における蓄積をカイロでの問題解決に適応することとなり、また公的権力と住民とのあり方のエジプトと日本との差異が明確になりつつある。

熊本には5月19日～22日まで滞在し、鶴嶋俊彦(熊本市経済観光局)及び伊藤重剛(熊本大学)の案内による熊本城の復旧作業の見学、富士川一裕(熊本まちなみトラスト)及び伊藤の案内による、新町古町の街づくりと被災状況の見学を行った。5月21日(日)には、熊本まちなみトラストと共催し、ワークショップ「エジプト・カイロの歴史的街区と生活環境の共生—新町古町の共通点を踏まえた展望」を開催した。講演は、富士川と共同研究者の原田怜とアラーが行った。司会は、共同研究者の岡田保良が担当、ディスカッションには共同研究者の宍戸克実が加わり、合計13名でディスカッションを行った。

京都に移動、5月22日～25日まで滞在し、共同研究者布野修司の他、魚谷繁礼(魚谷繁礼建築研究所)、森田一弥(森田一弥建築設計事務所)の案内により京都の都市組成と歴史的住居のリノベーション例の見学を行った。5月24日には、講演会「カイロと京都 歴史都市と建築」を主催した。講演は、アラー、魚谷、森田、川勝真一(RAD)、文山達昭(京都市役所)が行った後、コメンテーターとして布野、深見を迎え、柳沢究(京都大学)のコーディネーターにより、30名以上の参加者ととともに進めた。

最後に、東京に移動し、5月25日～28日まで滞在した。5月27日に川越市立博物館にて、川越蔵の会と共催し、講演会「歴史的地区における持続的コミュニティとは？」を開催した。講演は、アラー、深見の他、荒牧澄多(npo 法人全国町並み保存連盟)によって行われ、52名が参加した。

5月28日は、NPO たいとう歴史都市研究会の案内による上野公園と谷中の街づくりを見学した後、朝倉彫塑館において、アラーと椎原晶子(NPO たいとう歴史都市研究会)が講演を行い、NPO たいとう歴史都市研究会、谷中地区まちづくり協議会環境部会、一般社団法人谷中のおかって等の担当者と、プロジェクトメンバーのアラー、深見、原田で意見交換を行った。

招聘中多くのアイデアが生まれ、プロジェクトメンバーの中で活発な意見交換を行った。この結果、一年目の活動は、地域の人が今ある環境に目を向けるためのワークショップのテーマを設定していたが、二年目の活動目標としては、地域の人が今ある環境をどのように変化、活用させていきたいかを考えるテーマを中心としたワークショップにしていこうとした。また、これらのワークショップや講演会を通して、現在カイロの当該地域で芽生えつつある住民の遺産

に対する意識をどのように持続させていくのかということが、大きなテーマとなることが判明した。そのために、1) 将来リーダーとなるような若い世代(中学生や高校生)と情報交換を行うこと、2) 現在コミュニティを主導している壮年・青年層とのワークショップを開くこと、3) 日本の外務省支援による草の根案件に応募することなどを、2年度目の活動目標とした。

(4) その他の活動

その他、建築科学生への啓蒙、共同研究者の現地調査、草の根安全保障への応募なども行った。

建築科学生への啓蒙に関しては、「第 12 回ワークショップ」で述べたエジプト人学生と日本人学生の共同設計案、「第 2 回シンポジウム」で述べたエジプト人学生によるスークシラーハ改良コンペである。また、日本語通訳を引き受けてくれたエジプト人学生たちや共同研究者以外の日本人参加者も、このプロジェクト以前には来たことのない地域であると語り、カイロの歴史遺産に対する覚醒は、地域住民だけでなく、学生やカイロに在住する日本人にも普及した。

共同研究者の現地調査としては以下のものが挙げられる。

宍戸は、スークシラーハのアフワ(伝統的コーヒー店)の分布調査から始め、歴史的カイロのほとんどの地域のアフワの所在を調査した。アフワは特に男性を中心としたコミュニティのいわば集会所のような役割を果たし、コミュニティの絆を考える上で重要な存在で、この分布調査をもとにコミュニティのあり方を再考することを予定している。

布野は、スークシラーハ一帯の、ファサード写真、階数、建設年、建物様態などを調べ、地図に書き込んだ。通りのファサードは 14 世紀から続く通りに、現代までの建築がモザイク状の構成を見せているが、特に革命後の高層建築や派手な色合いの突飛なアパートなど、世界遺産コアゾーンの景観にそぐわないものも多い。将来的な展望として、現在の状況に関する景観的提案を作成する。

2017 年 4 月 16 日～17 日に深見、磯野、原田がスークシラーハの住民 11 世帯(男性を中心に)に、スークシラーハで欲しいと思うもの、男性の生業と住居の関係、今後のスークシラーハのあり方などを中心に聞き取りを行った。女性の場合、結婚を機にスークシラーハに住むようになった人もいたが、男性の場合、代々の生業をついでおり、店や住居を借りている人も多く、スークシラーハをより広げたダルブアフマルとのつながりが顕著であった。

この調査の続きとして、原田は、女性を中心に住民の聞き取り調査を続け、ワークショップに参加したことによる意識の変化を調査した。また深見は職人の工房を訪れて、現状における問題点等について調査した。

さらに、このプロジェクトを機に、在エジプト日本大使館の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」に応募し、バイトヤカンを中心としてコミュニティと工芸(住民の生業)を結びつけていく可能性を模索している。スークシラーハは前近代には武器作りなど金属加工を中心としたエリアであったが、現在は家具を中心とした木工職人が集中している。また手工芸品を作成してそれを販売したいと思っている女性も多い。このような状況の中で、伝統的建造物を用いて職業

訓練、職の情報交換(機器の貸し借り)、販売センターなどを目論んでいる。

(5) 本研究の成果

一年度目には、女性を中心に衣食住を含めその中に流れている先代、先々代からの習慣や伝統が現在の生活に大きく関与していることへの理解に集中した。その結果、エジプトにおいては家族が大事で、家族のなかで守られてきたものについては関心が高く、時間の流れについての理解は促せたと実感する。一方、子供たちには、みんなで活動する側面が欠けていたので、周りの人や環境についての理解を促した。成果として、バイトヤカンという場所では、ゴミは拾わねばならないとか、食事は並んで順番をまたねばならないというような、基本的な集団の約束事については守れるようになった。しかしながら、女性も子供も、時間的な積層が居住環境の総体としての街を作り上げ、それは自分たちのものだという方向性までには至らなかった。

2年度目には、男性に枠を広げることによって、積極的な街への関与を目指し、一方、女性と子供にとってはバイトヤカンをどのように活用したいのかという卑近な点に照準を当てた。先述したように、男性は木工ユニオンに向け、女性は手芸教室に向け動きつつある。そうした中で、男性たちには、木工という職業や、日々の生活、あるいは観光という夢物語を通じ、「歴史的カイロ」への意識は認められる。しかしながら、女性たちの中で遺産を自分や家族の歴史とつなげて誇らしく思える人は限られ、本ワークショップに参加したのちにも、日々の生活や子供の教育が先立つものと認識する人が多い。とはいえ、一部とはいえ住民女性の中に芽生えた遺産への眼差しを、今後より多くの女性に共有していく必要がある。なお、本ワークショップに参加した子供たちに関しては、特にティーンエイジャーには歴史遺産に関する啓蒙は、バイトヤカンでの活動、アズハル公園や美術館訪問などを通して、ある程度伝わったのではないかと思われる。その成功の要因には、バイトヤカンという修復の進む歴史的建造物の中で、2年間にわたってその変化を見ながらワークショップを続け、常々私たちから遺産に対して働きかけたことが大きい。

以上をまとめると、本研究の成果の一つとして、未だ遺産に対する意識覚醒までには至っていないものの、ワークショップを通じて住民の意識変化が観察できた。

大きく変化したと確認できる点には、以下の点がある。第一に、エジプトではゴミを所構わず捨ててしまう人が多い。最初のワークショップでは、バイトヤカンの中庭にゴミが散らかり、口うるさくゴミ箱への処理を誘導した。しかしながら、アズハル公園では、子供達が自分からゴミ拾いできるようになった点は大きな成長である。また、この地区でカイロ市の修景プロジェクトが進行していることもあり、プロジェクト当初に比べると街自体もゴミが少なくなった。また、2年度目から始めた参加者が路地のゴミ拾いをするという行動を通して、路地が綺麗になっていくことを実感し、公共空間という意識を覚醒できたと感じる。

第2に、住民との距離が近くなり、ワークショップに参加した人々のコミュニティが形成されつつある。子供達や女性とは顔なじみになり、みんながワークシ

ヨップを楽しみ、次のワークショップを楽しみにしている。まだ、自分たちの街の遺産を守ろうというところまでは達していないものの、本プロジェクトの意図は確実に伝わり、住民自体が新たなプロジェクト参加者コミュニティを形成するようになった。それは、女性参加者がここに参加することで、友達ができ、楽しい時間を過ごせるようになったと語る側面や、男性が自分たちのユニオンを作っていこうという側面に現れる。しかし、これが持続的なコミュニティとなるためには、それを支えるものが必要である。それを支えるものとは、バイトヤカンでの活動であったので、今後もコミュニティをつなぐ場所と機会は必須なものと考えらる。

第3に、誘導もあるかもしれないが、聞き取りの中で、スークシラーハやダルブアフマルという地域名が頻出するようになった。最初の頃は、エジプト、カイロなどというくくりでの話が多かったが、近頃はより小さなスークシラーハやダルブアフマルとこのワークショップが結びついていることを住民自身が感じているように思う。歴史的街区や歴史的な遺産に関する住民の認識を探るとともに認識を高め、その結果として歴史的街区及び遺産が、住民から機能的な、あるいは、美的な歴史的な地理的な様々な意味をもつためにこの地域が何らかの価値を持ち始めたことを表すのではないだろうか。こうした状況こそが、プロジェクトの目標としての持続を成し遂げられるといえよう。

こうした住民啓蒙活動の結果、バイトヤカン周辺の NOUH による街路改良プロジェクトや日本政府の草の根支援の実際のプロジェクトが実現する可能性を得たことは、大きな成果であったと言える。これは、単に住民だけでなく、行政側にも同時に働きかけたことによって導かれた。しかしながら、まだ計画段階で実現はしていないので、今後の関与と観察を要する点である。

さらに、本活動には大きな副次的な研究成果があった。「地域住民の遺産に対する意識を覚醒する」という目的の背後には、「歴史遺産を持続させるためには住民の積極的な関与が必要である」という前提があった。すなわち、現状においては歴史遺産に対して住民は保全しようとか自分のものだと思う意識が薄いということである。

その原因はどこにあるのだろうか。歴史遺産は住宅等、個人に属するものもあるが、街路を始め、その多くは前近代には公共の場や施設として機能する「みんなの場所」であった。ところが、現在、この地区の住民にとって、「みんなの場所」は存在せず、コミュニティは存在感が薄い。街路に無意識にゴミを捨てることもその一例といえる。また、本プロジェクトのワークショップを通してバイトヤカンを拠点に新たなコミュニティが形成されつつあることは先述した。

コミュニティ意識が希薄となった背景には、20 世紀初頭からの生活の近代化、1950 年代からの都市開発と避難民の流入、1980 年代からのカイロの巨大化による新住宅地の開発、ムバラク時代の遺産行政、革命以後の宗教施設のあり方などがある。カイロでは、前近代には存在した「みんなの場所」が都市から消え、地域に根ざした「みんな」を作るのが難しい社会になりつつある。

歴史的街区を持続させるためには、住民のみんなの場所、公共の場を取り戻していくという作業が必要である。考古省は、歴史遺産を修復はするが、モスク以外の墓やサビール・クッターブ(学校付き給水所)は鍵をかけて使わないままで、

街の看板にはなっているものの、活用はなされていない。ワクフ省の管轄であるモスクは、礼拝に使われてはいるものの、昨今のシーシー政権の元、不当普及の集まりはできないようにと、礼拝時間以外は鍵をかけてしまう。街路はアフワの席が広がり、当局のごみ収集の場になる点では、みんなの場所の役割を果たしているとはいえ、交通量の多さから子供の遊び場としては機能できず、路地はゴミだらけである。

街路に関していえば、前近代には、大通り、街区の通り、袋小路としての路地といった段階的な空間構成が取られてきたことは既往の研究で明らかで、しかも街区門や袋小路の門などを備えていた。しかしながら 20 世紀初頭以後、空間を区切る門は交通を妨げ不必要なものとして排除されてきた。

みんなの場所は、階層性を持っていて、みんなの大きさ、すなわち段階的なコミュニティに対応する場であったのだ。しかしながら、近現代のエジプトはかなり権力が持つ力が大きく、むしろ権力側に都合の良い人々の集合、例えば学校や会社、都市などは残っていったが、不透明な小さな集合は排除された。

今後、歴史遺産を軸として都市の保全や再開発を行って行く際には、階層性のある公的空間(みんなの場所)を確保していくことにより、住民意識の中に自分たちの遺産としての意識がより強くなることが期待される。本活動はその一つの事例としても位置付けられる。

なお本研究の成果として、共同研究者の原田が金沢大学(2016 年 7 月 2 日)および筑波大学(2017 年 3 月 10 日)、東京文化財研究所(2018 年 1 月 19 日)、東京藝術大学(2018 年 3 月 22 日)、メリーランド大学(2018 年 4 月 13 日)において、宍戸が JSPS カイロ研究連絡センター(2016 年 9 月 8 日)および京都大学(2016 年 11 月 9 日)において成果の一端を発表、代表者深見は、アラビア語新聞 AHRAM 誌(2016 年 3 月 6 日付け)、英文 JSPS エジプト同窓会誌 HORUS(2017 年 3 月発行)、『野蛮ギャルド(藤森照信古希記念論集)』(2017 年発行)に本プロジェクトの内容について発表した。また深見はセビリアで開催される世界中東会議(2018 年 7 月 20 日)で本研究の成果を発表することを予定している。